

服装の評価をめぐる表現

—ハヌノオ・マンヤン族の事例調査から—

亘 純 吉

Expression of Clothing among the Hanunoo-Mangyan

Junkichi WATARI

This paper presents a case study of the clothing culture of the Hanunoo-Mangyan tribe in the Panaytayan area, Mansalay, Oriental Mindoro, Philippines. Two points about Hanunoo-Mangyan clothing and society are examined: how Hanunoo-Mangyan clothing is expressive of the tribe's cultural settings and behaviors.

Upon attaining adulthood, members of the tribe engage social life through clothes, for following formal and informal codes for wearing clothes. Inhabitants have a wide choice of dress for everyday life. Selection is governed by social pressures reinforced by magico-religious sanctions.

I はじめに

衣服の機能には、まず第一に暑さ寒さなどの自然環境から肉体を保護するために装うことがあげられる。衣服は、その地域の自然環境に対応した展開がみられるが、それは、すでに衣服が自然環境のために第一次の分節をうけていることを意味している。

いわゆる衣服の実用的機能は、衣服が自然環境に対抗する人間の技術である、と位置づけることも可能ではあるが、社会的・文化的な価値体系を反映することによって、衣服は新たに意味的な機能を展開する [Ogibenin, 1971: 14]。すなわち、衣服は、衣服それ自体と衣服を装う人びととの間に生じる意味的な機能を強く表出する¹⁾。

地球上のさまざまな文化を見わたすと、私たちの衣服概念とは異なる服装に驚かされる。しかし、生まれたままの姿で生活を営む者はない。いわゆる裸族と呼ばれる人びとの腰紐を基本とする装いをはじめ、全身をベールで包み目と手の一部しか露出しない装いなど、その装い方は千差万別であるが、人間は何らかの「記号(しるし)」を身体につけ、身体を秩序の体系〈文化〉に組み込む。それゆえ、衣服を装うことは、「人間とは」との認識に関わる世界観と

深く結びつく。しかし、日常生活ではこのレベルの意識は、あたりまえのこととしてその深層にしみ、意識の表層にあらわれることはきわめてまれである。日常レベルの衣生活は、着装規範(社会的に認知されている装いの体系)を遵守し営まれる。そして、私たちは、この規範からの逸脱をも内包しつつ、衣服をとおしてさまざまな情報の授受をおこない、それを意味あるものとして理解する。換言するなら、衣服は、社会的・文化的な脈絡のなかで、はじめて具体的かつ明確な意味をしめす、ともいえる²⁾。

本稿³⁾は、ハヌノオ・マンヤン族⁴⁾の日常生活における服装の評価を民俗レベルで描きだし、この種族(言語的集団)の衣服と身体をめぐる服装観を掘り起こすことを目的とする。この作業をとおして、衣服を着ることのなかにひそむ、文化の仕掛けを解きあかすこともねらいとする。

ハヌノオ・マンヤン族の伝統的な衣服はルタイ(*rutay*)と呼ばれ、男性の褌(*baʔag*)シャツ(*balukās*)、女性の腰布(*ramit*)ブラウス(*lambu*)⁵⁾からなる。シャツとブラウスの背の部分にほどこされた十字文様(*pakudūs*)の刺繍を特色とする。

今日、彼らは、低地に住むキリスト教徒のもたらす西洋化の波を正面から受け、服装もスカートやズ

ボンに代表されるいわゆる西洋スタイルの服装が学校教育など場をとおして広がりつつあることは、否めない。しかし、服装のスタイルにみられる表面上の変化とは異なり、彼らの衣生活の基層は伝統的な価値観に深く根づいている。

II 装うことと言葉

ハヌノオ・マンヤン族は、言語能力あるいはそれに基づく思考能力の意味にあたるイシップ (*ʔisip*) が備わることにより、人間 (*tāwu*) は身体に衣服を装い、かつ身体そのものをも律することができるようになる、と信じている。人びとは、人間がマンヤンの言葉を喋り、その言葉で慣習 (*ʔugāliʔ*) を理解し、その言葉で考え、その言葉でコミュニケーションが不自由なくできるようになるには、完成されたとみなされたイシップが備わってはじめて可能になると考えている。

言語をたくみにあやつる能力は、人間の成長にともない備わるという。言葉をたくみにあやつれない

(うまく喋れない) 子供 (*ʔanāk*) は、成長の過程にあるとされる。子供はさらに言語による意志疎通の程度によって、言葉をまったく理解することのできない乳児 (*lapsāg*) と、十分にはできない幼児 (*ʔanāk*、狭義) とに二分されている。乳児や子供が裸であったり、衣服を上手に装えず文化的に特定された身体を露出していても着装規範からの逸脱とみなさないのは、子供がイシップの形成過程にあるため、と人びとは説明する。

言葉によって自己を表現することができる者は、一人前の人間になったとみなされ、当然自らの身体を衣服で整える能力をもつとされる⁵⁾。その時期は、男性が声変わり女性が初潮で、以後青年 (*kang ākan*、未婚の男子) あるいは娘 (*darāga*、未婚の女子) として社会的に認知され、大人として扱われる。

ハヌノオ・マンヤン族にとって言語を上手にあやつるとは、たんに言葉が喋れるだけのことではない。言語的な意味の同一性を保ちつつ言語のメッセージを変化させる、つぎの方法とそれらを理解することのできる能力をもちあわせることが大切であるとい



第1図 日常生活と服装

う。

- 1) 通常とは逆の発声で、吸気によっておこなう発声 (*pahāgut*)
- 2) かすかに聞き取れる程のささやき声 (*yanās*)
- 3) 語尾をおとす早口の発音 (*paliksi*: イントネーションの幅の拡大、長母音の短縮などを特徴とする)
- 4) 裏声 (*padikutun*) (Conklin [1959: 222] による)

これらの発声法が一般に見られるのは若者の求愛行動 (*lāvis*) である。結婚⁹⁾適齢期の若者は、配偶者を求めて一人あるいは仲間とともにお目当ての娘の住む集落へでかける。夜もふけ周囲の者が寝しなかったころ、暗闇のなかで弦楽器 (*gitāra*) などをかなで、娘に近づき話しかける。若者は毛布 (*kūmut*) を頭からすっぽりかぶり話し方を変え、自らの正体を隠す。この場面での会話は、吸気による発声、ささやき声、早口などを訪問先の状況(周囲に人の有無)や回数によって変化させつつくみになされる。求愛の段階がさらにすすむと、アンバハン (*ambāhan*) と呼ばれる七音節ごとに韻をふむ民俗詩の交換がおこなわれることもある。若者は、言葉の能力 (イシップ) をしめし、立派に成長した心身を披露する。

III 衣服の状態とその表現

ハヌノオ・マンヤン族の装いは、近年の我国で見られるような流行や多様な表現形式を特色とする衣生活ではなく、衣服の様式は固定的で、その表現の振れはばは極めて狭い。このような様相を背景になされる衣服の評価は、サイズなどの衣服自体に関わる評価と着用することによって生じる汚れなどの衣服の状態の変化に対する評価とに焦点が絞れられている。

人びとは、衣服の総合的な状態を判別する際に「よい (*māyad*)」あるいは「よくない (*pūnman māyad*)」と表現する。これに対し、衣服の個々の状態を対象とする表現では、衣服の望ましい状態、たとえば、「汚れがない」、「臭いがない」、「損傷がない」、「色がきれい」などは個々の表現に対しても「よい」と表現されるが、負の評価をもたらす衣服の状態は、個々の状態にそくした表現がなされる。以下、衣服の状態を判断する6要因についてふれる。

1 新しい・古い

衣服は、新しい (*bāgʔu*)、古い (*dāʔan*) および両者の中間的状态ヒルマアン (*hilumāʔan*) で「新しい・古い」を表現する。

1) バッグオ (*bāgʔu*)

バッグオは、「新しい」を意味する。新調した衣服を示す場合と使用された衣服でもその総合的な状態が新しいとみなされた衣服に対する表現である。

2) ダアン (*dāʔan*)

使用により、衣服の状態が古くなったとみなされた衣服に対する表現である。

3) ヒルマアン (*hilumāʔan*)

衣服の状態が新しいと古いの中間的であるとみなされた際の表現である。ダアンが「古い」に力点が置かれているのに対しヒルマアンは「かなり使い込んだ」を強調する表現である。

2 サイズ

衣服サイズは、衣服と着装する者との相対的なサイズと絶対的なサイズとがある。着装する衣服が適切なサイズであればカングオッド (*kagʔūd*) と表現し、「よい」衣服とみなされる。カングオッドは、日本語の「ピッタリ」の意味に相当する。

1) ダカ (*dākaʔ*)

衣服の絶対サイズが「大きい」とき、あるいは着装時の衣服と身体の関係で衣服が「大きい」ときの表現。

2) ディイット (*dīʔit*)

衣服の絶対サイズが「小さい」とき。また、衣服が小さく着装できないものもディイットと表現する。

また、上半身に装うシャツとブラウスが「ダブダブ」な際の表現を、ラウラウ (*lāwlaw*) という。この表現は、シャツとブラウス(上衣)を対象に限定的に用いられる。なお、褌や腰布などの下衣に対する表現は、いずれの衣服とも個人の体形にあった装いを方をするもので、被服構成上の特色によりこれに対応する言い方はない⁷⁾。

3 汚れ

汚れの総称は、マウリング (*maʔurīg*) といい、衣

服に付着した汚れは洗濯 (*pipiʔan*) によって除去できる汚れ (*ʔuriŋ*) と、除去できない汚れ・しみ (*dugtaʔin*) とに二分される。

a 洗濯によって除去できる汚れ (*ʔuriŋ*)

- 1) アムリンギン (*ʔāmlin*) カビによる汚れ
- 2) ブルドヒン (*buludūhin*) 鼻水による汚れ
- 3) カインギン (*kāiŋin*) 大便による汚れ
- 4) イヒアン (*ʔihiʔan*) 小便による汚れ
- 5) ルトッキン (*lūtukin*) 泥による汚れ
- 6) ウリンギン (*ʔuriŋin*) ほこりや煤による汚れ

b 洗濯によって落ちない汚れ・しみ (*dagtaʔin*)

- 1) プタイン (*pūtaʔin*) バナナなどの粘性のあるアクによる汚れ
- 2) タグキン (*tagūkin*) 樹液による汚れ
- 3) ティムギン (*tīmugin*) 排尿などにともなう黄ばみ
- 4) ドウグイン (*dūguʔin*) 血液によるしみ
- 5) ナナイン (*nanāʔin*) 膿による汚れ
- 6) ブンガイン (*bugāʔin*) ベートルナッツによる汚れ
- 7) アムリンギン (*ʔāmlin*) カビによる汚れ洗濯しても落ちないしみ

4 臭気

衣服は、臭いのない状態あるいは特定された植物などの香り (*mabāglu*) が「よい」とされる。付着する悪臭は、マバウオ (*mabāwuʔ*) として以下のような表現がなされる。

- 1) マバウオ・フラス (*mabāwuʔ hūlas*)
汗による臭い
- 2) マバウオ・カップオング (*mabāwuʔ kābʔuŋ*)
長期間衣服を着てつく汗や体臭のまじりあった臭い
- 3) マバウオ・アングロス (*mabāwuʔ ʔāŋrus*)
性器周辺の汚れを原因とする臭い (長期間締めなおすことなしに着装した褌につく臭い)
- 4) マバウオ・カイング (*mabāwuʔ kāiŋ*)
大便による臭い
- 5) マバウオ・アギット (*mabāwuʔ ʔāgit*)
小便による臭い
- 6) マバウオ・ダガット (*mabāwuʔ dāgat*)
海へ漁に行った際につく海水の臭い

7) マバウオ・アギウ (*mabāwuʔ ʔāgiw*)

煙 (焼畑、コプラ作りなどの際につく) による臭い

8) マバウオ・ルウ (*mabāwuʔ lūʔu*)

根茎類 (ガビ、ヤム、サツマイモなど) バナナ、ココヤシなど植物による臭い

9) マバウオ・ラングトット (*mabāwuʔ lāŋtut*)

洗濯をして放置したり、雨続きにより乾燥が充分でないつく腐った水のような臭い

10) マバウオ・ヤングシ (*mabāwuʔ yāŋsi*)

動物の死臭 (骨掘り儀礼などのときにつく死臭を含む)

11) マバウオ・ブヨック (*mabāwuʔ būyuk*)

動物の腐食臭

12) マバウオ・ラングサ (*mabāwuʔ lāŋsa*)

動物の生臭い臭い (ブタを殺した際につく臭い、魚の生臭い臭い)

なお、体臭の強い者は、麝香猫に例えられ、シナガルンゴン (*siŋalūŋun*) と比喩的な表現をおこなう。

5 色

衣服の色変化は、着装による黄ばみ、黒ずみなどの変色や退色⁸⁾と洗濯による色うつりとがある。

a 着装によって生じる退色

1) マウリング (*maʔuriŋ*)

マウリングは、前述した衣服の汚れも表現するが、衣服と色の関係に焦点が絞られる場合は、全体に黒ずんだ色調をさす。狭義には、白色 (*malāgti*) の衣服の黄ばみ・黒ずみを表現する。

2) マダプッグ (*madapūg*)

伝統的には、アイ染めによって染まった青黒色系 (*mabiru*) の退色を表現するが、明度の低い黒や緑などの色の退色、汚れによる黒ずみをもさす。

3) マプシヤウ (*mapūsiyaw*)

色あせをさす表現。とくに赤色系 (*maragāŋ*) の布でおきる退色をさす。

b 洗濯を原因とする変色

1) キヌパサン (*kinupāsan*)

洗濯による色うつりをさす。例えば青色の衣

服を白の衣服と一緒に洗濯する際におきる、白い衣服に青色が移るなどの色うつりをキヌパサンという。

2) キンムパス (*kinmūpas*)

洗濯によって生じる退色あるいは色あせをさす。

6 損傷

衣服の損傷は、穴、破れを対象に表現され、形状と程度により、つぎのように表現される。

1) ブスロット (*būslut*)

小さいホール状の損傷

2) ブスワング (*būswag*)

大きいホール状の損傷。とくに、布地が使用により弱くなってきた時に発生するホール状の損傷で修復が不可能である。

3) ギタス (*gītas*)

小さな裂け目 (かぎ裂き)。

4) アリダット (*ʔarīdat*)

中位の裂け目。

5) サングサング (*sāḡsaḡ*)

繕いによって修復が不可能な大きい裂け目。

なお、ブスロット、ギタス、アリダットは、いずれも、あて布による繕い (*lūpnan*) と縫い合わせによる繕い (*tahīʔan*) が可能である、といわれている。

衣服の状態とその総合評価

衣服の状態を総合的に「よい」あるいは「よくない」とみなす際には、新しい古い、サイズ、汚れ、臭い、変色、損傷の状態を踏まえて総合的になされる。「よい」と判断される衣服は、「新しい」「(サイズの)ぴったりとした」「汚れのない」「臭いのない」「白色の」あるいは「色のきれいな」「色うつりのない」「損傷のない」など衣服の個々の「よい」状態を示す意味連鎖の上に成立している。これに対し「よくない」は、「古い」「使い込んだ」「だぶだぶな」「きつい」「大きすぎる」「汚れている」「臭い」「黒ずんだ」「色おちした」「色うつりした」「損傷のある」などの意味連鎖をもつ。

衣服に加わった「臭い」「汚れ」「損傷」の要因は、衣服のみならず着装者に対する評価を下げる要因となるが、「新しい」「古い」「色おち」「色うつり」に

対する評価は、前三者に比べ積極的になされるとは言い難い。これは、衣服を評価する際の主要な判断基準となる「汚れ」「臭い」「損傷」が「洗濯」と「繕い」という衣服の再生行為がともない、個人の衣服管理が着装者の社会的な評価に結びついているからである。なお、衣服の維持管理は、女性の仕事とみなされており、衣服の維持管理に関する評価は、女性 (母、妻) の評価を誘発する。

IV 服装の評価にかかわる表現

1 服装の社会的枠組み

ハヌノオ・マンヤン族の衣生活は、他者の服装評価をなるべく受けない、すなわち目立たない服装を留意しつつ営まれる。人びとは、服装の社会的枠組みにそって身体-衣服を位置づける。それは、つぎにのような言いかたで表現される [亘 1990: 100]。

「私は他の人びとと同じ衣服を着ていたい」

ʔāku magkaʔibūḡ manūluḡ rūtay parehū sa ibā tāwu あるいは

「私は、きっと他人から嫉妬されるから新しい衣服を日々着ない」

ʔāku bālaw magkaʔibūḡ manūluḡ rūtay bāḡʔu sirap̄sirap̄ nākan barān hirākan ʔibā tāwu

服装を<目立つ><目立たない>という対立の中でとらえるなら、あくまでも目立たないことが強調される。換言するなら、自らが進んで衣服の持つ記号性を消しさをめざしている、ともいえる。

人びとが、もっとも気を配ることは、彼らの服装が彼らの服装の社会的枠組みにあてはまっているか否かということにある。たしかに、目立つ服装とは、それに意味があることを明らかにする。しかし、目立たないということは、その服装が意味あるものとして文化的に読めないということではない。

人びとは、周囲の状況に適切であるとする服装に対して価値的な判断をくだす。彼らには、他人との差異のない均質的なあるいは平等的な生きかたを有価値とする考えがある。日常生活では、とくに物質文化の側面でこの価値観が強く反映し同質あるいは同量であることが意識され、かつ強調される。

日常の服装には、この価値観を背景に社会的に浮

き上がりたくないあるいは目立ちたくないという心理が強くはたらく。人びとは、目立つとみなされる衣服の選択あるいは着装行動を極力回避する。それは、目立つ服装が「他人からの嫉妬や羨望の対象となり、呪術によって病気にされてしまうという」と信じられているからである。人びとは、服装がもたらす社会的な評価に対して気をくばり、呪的制裁をともなう規範にしたがう⁹⁾。

そのため人びとは、新しいあるいは素晴らしいとみなされる衣服を積極的に身につけることはしない。さらに、古い衣服でも、被服管理が比較的のゆきとどいた衣服は、焼畑での労働や集落での日常生活で装うことはない。それらは、他の集落への訪問、学校での催し、礼拝、マンサライの町への買い物などの楽しみあるいは祝祭に準ずる場面で装われる傾向が著しい [Watari 1985: 98-100]。

2 服装の評価

ハヌノオ・マンヤン族は、他人の服装を観察し、その装いに評価をくだす。日常生活のなかで社会的な評価を受ける目立つ装いは、つぎのような側面が強調される。

- 1) 毎日衣服を着替える
- 2) よいとみなされる衣服を着る頻度が高い
- 3) 真新しい衣服や装身具
- 4) 正装とみなされる装い

このような装いを行う者に対し、人びとは当事者の前での評価をさけ陰で噂する。例えば、つぎのような会話表現は、衣服を所有し装っている者への嫉妬や羨望を織りこんでなされるという。

「あの人は、(いつも) きれいな (あるいは素晴らしい) 装いだ (*urāgin siyā*)」

「あの人の盛装は、素晴らしい」(*padayaw-dāyaw siyā*)

ウラギン (*urāgin*) あるいはパダヤウダヤウ (*padayaw-dāyaw*) を当該の者を目の前にして「素晴らしい装いですね (*urāgin / padayaw-dāyaw kāwu*)」と言うことは、相手に嫉妬あるいは羨望を直接ぶつける行為とみなされる。それは、相手を呪的に攻撃することと同じであると判断されるため、回避する。もしこの様な会話がなされた際には、最悪の場合親告され裁判に持ちこまれても不思議ではない、という。ただし、この表現が近親者あるいは家

族で年齢の高い者が低い者に対して向けられた際には、着装規範からの逸脱を論ずる意味をもつ。

服装の評価は、共時的と通時的の二つの側面をもつ。前者は、その場、すなわち空間における服装それ自体に対する評価に焦点が絞られる。これに対し後者は、時間的な経過の上に成立するもので、衣服のみならず身体と衣服がかもしだす人物像に対する評価へと広がる。ここで取りあげた4評価のうち1) 2) の項にあたる評価のめやすは、通時的な評価に比重をおくものである。なお、前4項の着装規範からの逸脱が恒常的な場合には、マンヤンとは異なるイシップが当該の人物に備わったとみなす¹⁰⁾。

3 服装の評価にかかわる比喩的表現

服装の評価、すなわち服装コンテキストからはずれ目立つとされる服装に対する評価は、素晴らしさとみすぼらしさの両面に視点がおかれる。

a 素晴らしさを対象とした表現

ハヌノオ・マンヤン族が他人の服装について評価する際には、直接的な表現を極力さけることが望ましい態度とされる。日常の会話表現のなかでは、比喩的な表現が頻繁になされる。しかし、素晴らしいとみなされる服装に対し、いかに比喩的な表現を用いようとも、嫉妬・羨望の心理が程度の差こそあれ含まれることには変わらない。したがって、会話のなかで服装の評価を口にする際には、さりげなく比喩的な表現を用いて服装をとおした人物像を判断することが期待され、それはまた洗練された会話であるとみなされる。おもな、表現とその日本語訳は、つぎのとおりである。

- 1) 「あの木の枝ぶりは、立派だ」

pagkāyu mayād gid kay lābuṅ maraybūṅ
服装全体を評価の対象とした表現。

- 2) 「家の壁は、いつも新しく、古くならない」

pagbalāy pīrmi gid bāḡu kay līgub ʔūn-man magkalūmaʔan

新しいを強調した服装に対する表現。あるいは、素晴らしい衣服をいつも着ているような人に対する表現。

- 3) 「鶏の羽毛は、いつもきれいだである」

pagmānuk kay būlbul marīnu gid pīrmi gid magpānlus

色の美しさ強調した服装に対する評価。

- 4) 「海の魚の鱗は、油のようにつるつるしてきれいだ」

*pagʔisda sa dāgat mayād kay siksik ga pagla
ŋisan*

色の美しさ強調した服装に対する表現。

- 5) 「蝶の羽根の文様はすてきだ」

pagrīnu kay pakpāk ʔalibāŋbaŋ kay rirūk
シャツやブラウスにほどこされる刺繍は文様の美しさに対する表現。

- 6) 「錦蛇は、複雑な文様がきれいだ」

pagʔirāwu mayād gid kay rirūk sarisāri gid
シャツやブラウスの刺繍の十字文様の美しさ強調した表現。

- 7) 「鳥（ブラトック）の頭は赤いよ」

*pagbulātuk maragātuk maragāŋ gid kay
ʔūlu*

鉢巻の赤を強調した表現。

b みすぼらしさを対象とした表現

ほころびなどの損傷がある衣服の比喩的な表現は、服装に関わる話題のなかにしばしば登場する。そして、多くは着装者の評価に関与する。

人びとは、日常多少の損傷のある衣服を着用していても、着装者に対し「だらしない」「身体を整えられない」など人物像に関わる負の評価に直接には結びつけない。この服装の評価は、その個人が勤勉であるか、具体的には焼畑での耕作や機織りなどの仕事に精をだしているか、と重ねあわせて判断される。勤勉でないとみなされた者で、破れていたりほころんでいる、いわゆる被服管理のゆきとどかない、みすぼらしい装いに対しては、「みさげた」あるいは「さげすみ」の心理がはたらく。これらの表現は、つぎのような言いまわし方がなされる。

- 1) 「このバナナの葉は、裂けている」

tīda pagsāgiŋ kay labūŋ giyasgiyas
破れ、ぼろになった服装に対する表現。

- 2) 「この鶏は、羽が抜け皮膚がみえる」

tūnda pagmanūk payaspāyas kay būlbul
破れ、ぼろになった服装を強調した表現。

- 3) 「このバルゴ (*balūgu*: *Entada phaseoloides* L.) の葉は、裂け目がたくさんあり、蔓としてよくない」

*tūnda pagwākat balīgu guraygūray ʔunmān
mayād pagwākat*

ぼろになった褌に対する表現。

- 4) 「カマギ (草) を摘んだ臭いは、風上から鼻を刺す」

*tūnda pagʔilamnun kamāŋi makāŋlu gidnu
niʔūli gīnan sa bagyūhan ga pagʔisugsūŋ
sa ʔiruŋ*

日常の衣生活で衣服を着替えることなく、悪臭の漂う装いに対する表現。

このように比喩的表現の多くは、人びとの生活世界と深くかかわる自然の風景をさりげなく会話のなかに織りこんでなされる。

なお、人びとは、自らの装いが周囲の状況に照らしあわせて不適切と判断することがある。これは「恥ずかしい (*magkayʔaʔ*)」ことであるという。このような心理状態を、おじぎ草にたとえ「私は、おじぎ草を植える (*magtanūm ʔakū huyahūya*)」と表現する。

V おわりに

ハヌノオ・マンヤン族の服装観は、今日我国でみられるファッション的な変化に従属する傾向に価値をおくものではない。身体—衣服—社会の関係は、民俗的な認識に基づき語られている。

成人した者にとって衣服を装うことは、当たり前のこととして受け入れられている。彼らは、この社会的な規範に従った着装行動を可能にさせるのがイシップ (言語能力あるいは思考能力) であるとする。言葉を巧みにあやつれる能力、すなわちイシップが身体に備わることによって、はじめて自己を表現できる一人前の人間となり、自らの身体を整える能力を持つとされる¹¹⁾。

ハヌノオ・マンヤン族の日常の衣生活は、個人が自らの欲求を充足することよりは、社会的評価を常に念頭におきなされる。装いは目立たないことを第一義として選択がなされる。ただし、その場合でも、人に不快感をあたえない、いわゆるこざい服装が期待される。人びとは、この服装のコンテクストからの逸脱に対して気をくばる。その背景には、嫉妬や羨望を誘発する目立った服装に対して呪的な制裁が加えられる可能性があるからである。

日常の衣服と対比することができるのが、死者とともに過ごす骨掘り儀礼 (*kutkut*) に代表される祝宴

(*punsiyūn*) での服装である [Watari 1985: 101-102]。この儀礼は、ハヌノオ・マンヤン族の最大の関心事で人びとは、着飾り、会食し、踊り、楽しみ、日頃の恨みつらみから解き放されて一同に会する。人びとは、日常の着装規範に縛られることなく、正装する。それは、死者の住むあの世 (*karadwāhan*) の服装の完全無欠さにあり、その場に交わる人びとも死者と同じ美しく、素晴らしい服装を楽しむ。そして、その服装は、あの世までいたる。ハヌノオ・マンヤン族にとって理想とする服装は、あの世において装うことがかなうともいえる。

註

- 1) 衣服の実用的な機能は、すでにおこみずみとしてあつかう。このことは、日本のように四季に対応した装いの事例をとおして考えてみるとより明白になるであろう。私たちが、冬に薄手の夏服の装いを評価する際に、その方向は、衣服の有意味的な機能が拡大され、実用的機能を内包し、「(寒いのに暖かい衣服を着ることのできない) 社会的・経済的状況」や「(寒さに負けない身体や肉体の訓練をとおして表現される) 個人の意志あるいは人格的側面」が強調されてゆく。
- 2) 服装の社会的・文化的な側面に重点が置かれた文化人類学的な研究は、ソロバキアの民俗社会 [ポガトゥイリョフ 1937]、トゥワレグ族 [Murphy 1964]、アメリカ原住民(クワキウトル族とホピ族)の身体イメージ [Postal 1965]、アフリカのヌーア族 [Bedelman 1968]、身体装飾 [Seeger 1975]、動物の象徴性と服装観 [Kuper 1973]、女性の着装行動 [Holman 1980]、エジプト・イスラム社会 [大塚 1985]、西アフリカのイスラム社会の衣服文化 [嶋田 1990]、狩猟採取民ブッシュマンの身体性 [菅原 1993] などを対象に論じられてきた。
- 3) 本稿の調査資料は、すでに亘 [1984, 1990] が発表したものに、その後の調査で得られた知見をふまえて加筆修正したものである。
- 4) ハヌノオ・マンヤン族は、フィリピン、ミンドロ島東南部山岳地帯に焼畑農耕を生業とする人口約10,000人の種族である [Llamzon 1978: 88]。本稿のもととなる調査は、オリエンタル・

ミンドロ州マンサライ地区のバリオの一つであるパナイタヤンとその周辺の集落で1986年から1993年の間に6次にわたって実施した。したがって、本報告でいうハヌノオ・マンヤン族とは断わりのない限り調査地域に居住するハヌノオ・マンヤン族をさす。

なお、この種族を対象とした研究は、焼畑農耕文化 [Conklin 1957]、社会組織、宗教、慣習法に関する文化 [Miyamoto 1988]、民俗詩および口承文学 [Postma 1989] などがある。

- 5) 精神障害などの理由で、大人と見なされる年齢をすぎてもなお慣習から逸脱する行動をとる者、例えば素裸で行動する者、身体と衣服の着装規範が守れない者などは、異なるイシップが形成された、あるいはイシップの形成が不十分な者とみなす。
- 6) きょうだいと第一いとこの範囲内の性関係はタブー視され、それ以外、第二から第四いとこまでの親族との結婚には祈禱師 (*pandaniwan*) の儀礼を必要とする。若者がこの範囲以外の娘と婚姻をおこなうためには、かなり遠方まで求愛活動の必要がある。
- 7) ズボンやスカートなどが「ダブダブ」である際の表現は、ワルワル (*wāwāl*) (ラウラウを逆転して発音した造語) という。西洋スタイルの衣服の受容によって生まれた新しい表現で言葉あそびの様相もある。
- 8) 着装によって生ずる退色に関する表現は、彼らの染織技術相と対応する。白色系は木綿で素材本来の色であるが、伝統的な染色技術では、青黒系がインド藍 (*tāgum*: *Indigofera suffruticosa* Mill.)、赤色系がすおう (*shibūkaw*: *Caesalpinia sappou* L.)、インド茜 (*bagkūdu*: *Morinda bracteata* Rub.) を用いる。
- 9) 衣服をはじめとし物の所有に対しても「必要以上に物を持つと他人から嫉妬され、呪術によって病気にされてしまう」とする社会的規範はたらく。実際に数多くの衣服を所有している者に衣服所有数を質問すると、表面上では社会的に理想とみなされる所有数を答え、呪的な制裁をさける行動をとる。実生活においても、十着以上の腰布を所有するある老女の日常の装いは、二枚の腰布を取り替えつつ行ってるなどの事例

がある。

- 10) ハヌノオ・マンヤン族の居住地域は、1985年を前後に国軍と新人民軍 (NPA) 戦闘が激化した。この際、国軍が新人民軍兵士と住民 (マンヤン) の違いは服装にあり、褌をしめている者がマンヤンである、とする噂が調査地の集落に広がった。この集落に大学教育を受けた青年が住んでいた。彼は常日頃からズボンを装っていたが、この噂を境に褌を装うようになった。住民は彼がダムオン (低地キリスト教徒などの住む世界) の慣習が入り交じったイシップからハヌノオ・マンヤン族本来のイシップにもどった理解している。それを可能としたのは、戦闘の災いから家族の身を守るために義父のおこなった祈禱の力であると信じている。
- 11) 子供が大人になったとみなすのは、衣服によって身体を律することができることをはじめ、焼畑を経営ができること、家作りの能力があること、山刀を使いこなせること、次世代をつくる婚姻が可能な身体であること、社会的規範を遵守する能力があることなどで、ハヌノオ・マンヤン社会の他の文化的側面と整合性をたもっている様子がうかがえる。

引用文献

Beidelman, T.O.

- 1968 Some Nure Notions of Nakedness, Nudity and Sexuality, *Africa* 38(2): 113-132.

ボガトゥイリョフ, P.G.

- 1936 『衣裳のフォークロア』[松枝到, 中沢新一訳 (1981)] せりか書房 (東京)

Conklin, Harold C.

- 1957 *Hanunoo Agriculture: A report on an Integral System of Shifting Cultivation in the Philippines*, Food and Agriculture Organization (Rome)
- 1959 Linguistic Play in its Cultural Context, *Language* 35(4): 631-636

Kuper, Hilda

- 1973 Costume and Cosmology: The Animal Symbolism of the *Nwala*, *Man* (New Series) 8(4): 613-630

Holman, Rebecca H.

- 1980 A Transcription and Analysis System for the Study of Women's Clothing Behavior, *Semiotica* 32(1-2): 11-34.

Llamson, Teodoro A.

- 1978 *A Handbook of Philippine Language Groups*, The Ateneo de Manila Univ. Press (Manila)

Miyamoto, Masaru

- 1988 The Hanunoo-Mangyan; Society, Religion and Law among a Mountain People of Mindro Island, Philippines, *Senri Ethnological Studies* No.22.

Murphy, Robert F.

- 1964 Social Distance and the Veil, *American Anthropologist* 66: 1257-1274.

Ogibenin, Boris L.

- 1971 Petr Bogatyrev and Structural Ethnology, in *The Functions of Folk Costume in Moravian Slovakia*, Mouton (The Hague・Paris)

大塚 和夫

- 1985 「あご髭とヴェール — 衣裳からみた近代エジプトのイスラム原理主義」『民族学研究』50(3): 239-269.

Postal, Susan

- 1965 Body-Image and Identity: A Comparison of Kwakiutl and Hpoi, *American Anthropologist* 67(2): 455-461

Postma, Antoon

- 1989 *Ambahan Mangyan, Mangyan Treasures* (Mongraph No.2), Mangyan Assistance & Research Center (Mansalay, Or. Mindoro)

Seeger, Anthony

- 1975 The Meaning of Body Ornaments: A Suya Example, *Ethnology* 14(3): 211-224

嶋田 義仁

- 1990 「裸族文化から衣服文化へ — 西アフリカ内陸社会における「イスラム・衣服文化複合」の形成」『国立民族学博物館研究報告別冊』12冊 447-530

菅原 和孝

1993 『身体の人類学』河出書房新社（東京）

亘 純吉

1984 「焼畑農耕民の日常生活 —ハヌヌー・マンガ
ン族の衣服生活に関する報告(その2)
—」『四天王寺国際仏教大学短期大学部研究
紀要』25:1-14

1990 「服装からみた社会—ハヌノオ・マンヤン族
の調査から—」『服装社会学リポート』服装
社会学研究会（東京）

Watari, Junkichi

1985 Costume Culture among Mindoro High-
landers ; A Case Study of the Hanunoo-
Mangyan, *Filipino Tradition and Ac-
culturation —Reports on Changing Soci-
eties — Research Report III*, Philippine
Studies Program, The Institute of Social
Sciences, Waseda University.